



新納忠元物語 六

伊佐市立菱刈郷土資料館 指導員 原田純一

忠元 大口地頭となる

(伊佐地域の開発に尽力)

菱刈・相良連合軍は、永禄

十二年(1569年)九月十

日、相良帯刀、深水太郎左衛

門の二人を人質として差し出

してきたので同十四日、島津

軍は大口城の囲いを解き、相

良方の軍衆も退去して、同

十八日大口城に入城した。忠

元は、多年の軍忠至極の感

賞として、島津貴久から大口

地頭職且つ菱刈両院(現在の

伊佐市全域)総官を命じられ、

『武蔵守』の官位を与えられ

た。更に大口郷の領地を与え

ようとしたが島津家の領地が

減るからと辞退した、次に平

出水を与えようとしたがこち

らも辞退したので、『では自分
が希望する地は何処だ!!』
と聞いたら、『木ノ氏を賜り
たい。』と請うて許された。

この時、忠元四十三才であ
った。

拝領した木ノ氏は、不毛の
荒地で、住民も殆ど住んでい
なかつたので、家臣四十七家
を移住させ、相良氏からの防
備に備え武家屋敷群を整備し
た。今でも当時積まれた玉垣
が残されている。その後、木
ノ氏川西岸の開墾に着手し約
五十町歩(50ha)余りの水田
を開き、一ノ渡瀬に堰を設け
千百余間(約2km)の水路を
掘って水田を灌漑した。更に
水源涵養のため相良との国境
元古屋の山林に杉・桧・雑木

などの植林を行った。

さらに、牛馬の繁殖に勤め
させ、年一回、子牛の品評会
を行い優秀者には賞を与え、
農畜産の奨励に勤めた。

同時に、木ノ氏山畑に馬頭
観音を祀らせた。当初の御神
体は盗難にあったそうだが、
現在、飛諏訪神社境内に移さ
れた祠に、寛文十一年辛亥
(1671年)十一月一日奉造
立竹下十左衛門と刻まれたも
のが残されている。

その後、伊佐地域では畜産
が盛んになり、現在、馬頭観
音が伊佐市内に八十二体も祀
られている。

天正十六年(1586年)
に、島津義弘より大口城改修
の命があり、当時、表口となっ
ていた東口(水ノ手口)は相
良氏との攻防上頗る不利な地
形のため、武家屋敷を城西(現
在の諏訪馬場)側に移し、水
ノ手口側は水田とし、灌漑水
は、北北西の牛尾川を堰上げ

て新溝(忠元水路)を通した。こ
れにより、原田・小水流・耳田原
等の農民たちが競って耕地を拓く
に至った。

その後、耕地の拡がりに伴い、
水が不足したので、更に山野村牛
之子川(現在の十曾川)に堰を設
け水路を開設して牛尾川と合わせ
た用水とした。当時の開田面積は、
百町歩(百ha)余りであった。また、
数ヶ所の水門を閉鎖すれば、忽ち
池化せしめ大口城の外堀の役目に
なっていたといわれている。

現在では、豊穂井堰や大塚川か
らの用水を合流し、忠元水路(里
用水路)は、約百60haの水田を
潤し、市街地の防火用水にもなり、
市民にとって大切な水路となつて
いる。

☆次回は『曾木天堂ケ尾での

忠元と秀吉との会見(前編)』

(参考資料)

- ・旧記雑録後編一 167〜230ページ
- ・旧記雑録拾遺 忠元勲功記
- ・鹿児島県維新前土木史 30〜31ページ
- ・木ノ氏郷土史 2〜16ページ